次の文章を読んで，以下の問いに答えよ。

経済のグローバル化における勝ち組と負け組……

国境の「壁」が低くなって，ヒト，モノ，カネ，情報が自由に行き来するようになる経済では，**たくさんの良いこと**がある。たとえば……

【ヒト】 世界中で労働者は，自分にふさわしい仕事と待遇を求めて，国境を超えて就職をしていく。あるいは，若い人々は，自国で学ぶことが難しい知識を習得するために，海外に留学をしていく。また，世界中の観光地を自由に訪れることができる。

【モノ】 関税がかけられなくなって自由に貿易ができるようになると，海外から安価で良質のモノを輸入することができる。優れた技術を持った生産者は，海外に良質のモノを競争力のある価格で自在に輸出することができる。

【カネ】 事業を拡張したい企業は，国内の銀行からだけでなく，海外の銀行からもカネを借りることができる。カネを蓄えた投資家は，国内の株式だけでなく，海外の株式も積極的に購入することができる。

【情報】 インターネットを用いれば，家に居ながらにして，世界中の情報に接することができ，海外のモノを購入することも簡単にできる。

しかし，良いことばかりではない。**たくさんの悪いこと**も起きるのである。たとえば……

【ヒト】 海外から安い賃金で働く労働者が入国してくると，高い賃金を要求する国内の労働者は，職を奪われてしまうかもしれない。あるいは，失業を避けるために，安い賃金を受け入れざるをえなくなるかもしれない。

【モノ】 海外から安くて良質なモノが輸入されると，同じモノを作っている国内の生産者は，販売競争に負けて，廃業してしまうかもしれない。あるいは，生産の拠点を思い切って国内から海外に移さざるをえなくなるかもしれない。

【カネ】 麻薬取引で不正に儲けたカネを海外に送って，隠してしまうかもしれない。海外の投資家が国内の企業の大半にカネを貸し付けて，国内企業全体を支配してしまうかもしれない。

【情報】 国境を越えて行き交う国家機密，企業秘密，個人情報が，誰かに盗み取られて，悪用されてしまうかもしれない。

こうして見てくると，経済のグローバル化には，それをうまく活かして豊かになっていく人々，いわゆる**勝ち組**と，その犠牲者となって貧しくなっていく人々，いわゆる**負け組**がいるように思えてしまう。

経済格差の拡大

この教科書では，(1)「経済のグローバル化が勝ち組と負け組という格差を生み出している」という単純なストーリーは必ずしも正しくないことを明らかにしていく。むしろ，私たちが生きている経済社会の当事者となって，経済のグローバル化に向き合うことの意義を見出していきたいと考えている。

しかし，経済のグローバル化が進展した20世紀の終わり（1980年代，1990年代）から21世紀の初め（2000年代，2010年代）に貧しい者と富んだ者の間の**経済格差**が拡大したことも事実である。(2)経済のグローバル化と経済格差の拡大が同時進行したことから，前者が原因となって後者の結果をもたらしたと考えられたわけである。繰り返しになるが，そうした因果関係は必ずしも明らかなわけではないのであるが……

ここで経済格差や不平等の度合いを表す興味深い指標を紹介してみよう。以下で取り上げる不平等指標は，1 年間に生み出された所得について，高い所得を得た者から低い所得を得た者へと順に並べて，上位1%の者が経済全体の所得に占める割合（所得占有率）を示したものである。

たとえば，いま経済に1000人いて，経済全体の所得が10億円とする。総所得が等しく分配されていれば，1 人当たりの所得が 100 万円となる。この状況では上位も下位もないのであるが。1%の人々が全体の所得の 1%を占めるわけなので，この不平等指標は 1%となる。一方，指標が 1%を超えていれば不平等が生じていることになる。たとえば，この不平等指標が 10%であると，1000 人のうち 1%（10 人）の人が 10 億円の 10%（1 億円）を稼いでいるので，上位 1%の人は，1 人当たりで 1000 万円を稼いでいることになる。

一方，下位 99%の人は 1 人当たりで約 91 万円をえていることになる。したがって，上位 1%と下位 99%の経済格差は，1000 万円対 91 万円と非常に大きい。さらに，同じ不平等指標が 20%になると，上位 1%と下位 99%の経済格差は，2000 万円対 81 万円となる。

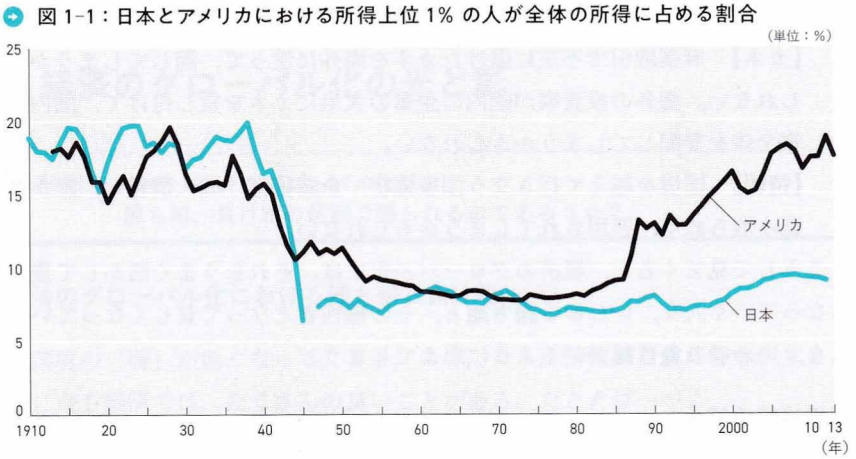
図 1-1 は，この不平等指標を使ってアメリカ（黒線）と日本（灰色線）の経済格差を測ったものである。第 2 次世界大戦（1939～45 年，（略））が始まる前は，アメリカも，日本も，不平等指標が 15%から 20%と非常に高い水準で推移していた。すなわち，戦前の両国は，非常に不平等な経済社会であった。しかし，戦中から終戦にかけて不平等指標は急速に低下し，両国とも 10%前後の水準まで落ちた。戦争が継続するなかにあって，両国の経済社会で平等化が進展したのである。戦後の両国は，1980 年代初頭まで不平等指標が 7%から 8%と非常に低い水準で推移した。

1980 年代半ば以降は，アメリカと日本では，不平等度の傾向が異なってきた。アメリカでは不平等指標が大きく上昇し，1990 年代末までに 15%を超え，21 世紀に入ると 20%に迫る勢いになった。

一方，日本の不平等指標は，1990 年代まで，7%の水準で推移した。しかし，日本も，21 世紀に入ると，アメリカほどではないが，経済格差の拡大が進行した。（中略），上位 10%の所得占有率で不平等度を見ていくと，日本でも 1990 年代以降の不平等度の拡大は顕著である。

まさに，アメリカでは，そして，アメリカほどではないが，日本でも，経済のグローバル化の進展と経済格差の拡大が同時進行したといえる。

図 1-1：日本とアメリカにおける所得上位 1% の人が全体の所得に占める割合



出所：森口千晶「日本は『格差社会』になったのか――比較経済史にみる日本の所得格差」『経済研究』2017 年 68 巻 2 号

【用語解説】

因果関係と相関関係

経済のグローバル化と経済格差の拡大が同時進行しているだけの関係は，相関関係と呼ばれている。もし，経済のグローバル化が原因となって，経済格差が拡大するという結果が生じているとすると，両者の関係は，因果関係と呼ばれる。ここで注意してほしいのは，相関関係があるからといって，すぐに因果関係を意味するわけではないという点である。

出典：齊藤 誠（2021）『教養としてのグローバル経済―新しい時代を生き抜く力を培うために』有斐閣，6～9 ページ。一部改変。

問 1 グローバル化の進展に関連して，経済格差の拡大が議論されていますが，筆者はどのような現象をもって，経済格差の拡大と指摘しているか，80 字以内で説明しなさい。

問 2 経済格差の拡大が指摘されるにもかかわらず，筆者が，「(1)「経済のグローバル化が勝ち組と負け組という格差を生み出している」という単純なストーリーは必ずしも正しくない」と主張する理由は何であると考えるか，80 字以内で説明しなさい。

問 3 なぜ，「(2)経済のグローバル化と経済格差の拡大が同時進行したことから，前者が原因となって後者の結果をもたらした」と考えられることが起こるのか，あなたが考える理由を説明しなさい。その上で，この(2)下線部のような命題の真偽を確かめるために，本来するべきことについて，できるだけ具体的に述べて下さい。全体で，800 字以内で述べて下さい。

以上